

■（１５１）都知事追い込んだ調査報道、記者も怖い

東京都の猪瀬直樹知事が辞職を表明した。選挙違反事件で逮捕者を出した医療法人「徳洲会」から５千万円を受け取っていた問題での引責だ。現金のやりとりが発覚したのは１カ月前の朝刊だった。そこで記事になれば、「永遠に闇の中」だったかもしれない。

調査報道だった。新聞は通常、警察や検察の動きを追いかけながら報じる。疑惑を追及するのは警察・検察で、新聞は疑惑を持たれた側の言い分も含め、捜査の動向を伝えている。ところが、今回は違う。記者が端緒を見つけ、自分らで「証拠」や「証言」を集め、新聞社の責任で追及する。つまり、事件記事でよく使われる、「〇〇署の発表によると…」というフレーズは使えなかった。全責任を負うので、もしも相手に理があれば、大変な事態に陥る。いつもの仕事以上に覚悟が必要で、「自分らが記事にしなければ不正が闇に葬られる」との思いが常に支えになる。多くの新聞社が取材力のある専門集団を抱えている。

知事はノンフィクション作家でもある。データや事実の積み重ねを大切にし、作品を書くのに部屋が資料の段ボール箱で埋まったとされる。同じ手法で追い込まれるとは……。 (山)